

川のためには山を、田畑と暮らしを守らねば！動物との共生も考えねば！同じことなんだけどあまり知られてない？話

今、全国の中山間地帯で、イノシシ、シカ、サルなどの野生鳥獣による農林被害が増加しています。もちろん森林面積が広く過疎地である四万十川沿いが例外であるはずもなく、ここ数年高知県の年間の被害額は3億円を超すともいわれています。農家にとって田畑を荒らされるとするのは金額以上に精神的なダメージが大きいこともあり、耕作を放棄する一因にもなってきました。耕作放棄地は、動物が田畑に近づく経路や、逃げ込んだり潜んでいられる藪となり、被害がさらに広がるという悪循環をも招きかねません。

特に2000年頃から鹿の個体数が増え、被害が出ていたのが四万十市西土佐です。目黒川と黒尊川の上流、三本杭から南に下って篠山（宿毛市）へ至る愛媛県松野町や宇和島市との県境にあたる一帯、また、ほけが森鍋が森から三原村へ続く分水嶺で、個体数と分布ともに急増してきたようです。

写真は昨年のもので、八面山から三本杭への尾根伝いにあった倒木の下、鹿が頭を入れ食べにくいところにだけ緑の笹が残っており、それ以外は笹だけでなく多くの草木が食べ尽くされています。落ち葉が積もった茶色い地面



は、登山道ではなく草刈り等の整備がされた都市の公園かのような様子です。下の写真では、真ん中の食害を防ぐためにネットで囲った中では笹が再び育っていますが、ネットの外は鹿が食べない馬酔木など限られた数種の植物だけの山になっている状況がはっきりとわかります。

高知県は平成24年度から毎年県内十数件の重点集落を対象とし、鳥獣対策課と市町村、JAの鳥獣被害対策専門員、猟友会、認定NPO 四国自然史科学研究センターとの協働で「野生鳥獣に強い集落作り事業」がすすめられてきました。集落で、動物の生態や対策についての勉強会、被害状況や集落の環境の調査、柵や防護ネットの設置、追い払い、ジビエ料理の講習会、罠の設置や狩猟免許の取得補助まで、様々な取組がされています。

人類にとって野生動物は先住者であり、長い間脅威であり、且つ恵でありました。これまではひたすら人口が増え続け、山林の奥深くまで田畑を広げ、動物たちはエサの確保も難しくなる一方、戦後の拡大造林などは広域の植生すらも変えるほど、生息域を圧迫し続けてきたのです。猟期を設定し、保護しなければならぬまでに個体数を減らしてきました。

ところがこの数十年、生活様式が急激に変わり、周辺の人口が減って、里山の環境や利用方法も変わりました。今度は、動物の方が田畑の作物を荒らすなどの被害が目立つまでになりました。シカは個体数が増え自然界の食糧が不足して、植生にこれまでと比べものにならない程の食害を与えています。イノシシやサルは、エサを求めて里山の人家近くまで出没し、品種改良された糖度の高い、柔らかい作物を覚えてさらに畑に入ろうとします。しばらくはあまり姿の見えなかった動物たちですが、人間と動物の生活の間にはずっと軋轢があり、それは新たな形になっても、ずっと続いてゆくのです。私たち人間は野生動物と共存して生きていかななくてはなりません。



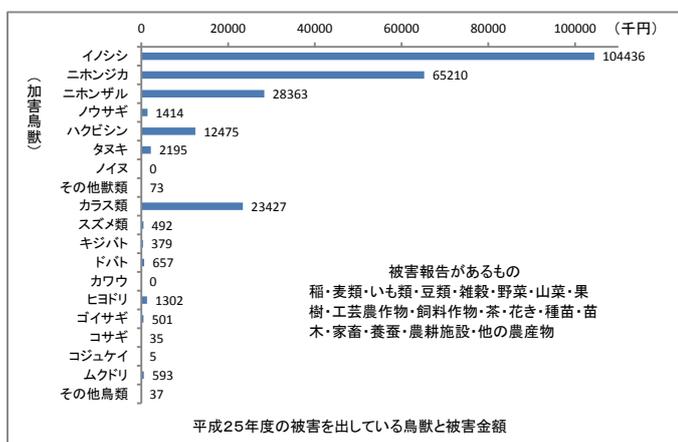
この8月～10月にかけて、越知町の横倉山自然の森博物館では四国自然史科学研究センターの監修で企画展「ヒトと野生動物との共生～鳥獣被害から田畑を守る～」が開催されました。展示の案内には、“今回の企画展では、野生動物による被害の実態とそれに対するいろんな対策方法などを紹介し、野生動物の被害から生活を守ると同時に、人間と同じ生態系の一員である野生動物と共生していくための方策を考えていきます。”とあります。今被害の出ている地区だけに限定されてる問題ではありません。これから当事者になる可能性もありますし、山や川がまだ気づかない大きなダメージをうけていて、影響がひろがるということも考えられます。被害のある地区をサポートするという意味でも、一緒に考えてゆく為にも、この時の展示の順に習い、できるだけ状況や対策を紹介しておきたいと思います。

1.) 被害の状況

被害は高知県内ほぼ全域に広がっていて、被害全体の6割程がイノシシとシカによる田畑の作物への食害、その他については、下のグラフのようになっています。

2.) 被害を出している獣の生態および特徴

イノシシは田んぼと畑に入って米や芋、野菜を食べる他、水のあるところで、ぬたうち=泥浴びをし、稲をなぎ倒したりします。シカは田畑や果樹だけでなく、植物なら一部を除いてほぼなんでも食べてしまいます。堅い樹皮も食べたり角ではがしたり、農林業被害を超え山の植生や希少な植物への影響が、繁殖力の強いことも加わり大きな脅威となっています。サルがそれに続きますが、シカとイノシシほど急に増えたわけではないようです。カラス、ノウサギ、ハクビシンなどが作物や果実そのものを狙う他にもモグラやアナグマは農作物そのものを食べるのではなくミミズを狙って根を掘り上げたり痛めて被害を出したりもします。この他幸い高知にはまだ入っ



ていませんが、アライグマなどの外来種が日本で野生化定着して被害を出している問題もあります。足跡、食べた物や方、食べ残しについての歯形や糞などで動物の種類を判断し、その種にあった対策をとることが肝要です。

3.) 被害対策

動物に荒らされないためには、周囲の環境を整備。

1) 田畑に誘引しない・・・人間にとって価値のないものでも、畑に出荷できないキズや割れた野菜を残したり、果樹を放置して収穫しないでおくのは、餌付けをしているようなものです。

2) 追い払う・・・本来野生の動物は警戒心が強く、畑の周りが広く見通せるようだとそれだけでも畑に近づきづらくなります。姿がみえたら、大きな音やロケット花火などで脅かし、追い払います。特にサルが里に下りてくると昼間活動する分目につき、人の方が怖がっているとだんだんエスカレートして嫌がられますが、早い内に追い払いを行うと、サルにとっては嫌なことをされる地域ということが、よく学習するからこそ、大いに有効です。

3) 囲って守る・・・イノシシには鼻の高さの電気柵、ワイヤーメッシュ柵が効果的、シカにはネットや金網の高さが2mは必要、高さに気をとられがちですが柵の下をしっかりと固定するのも大切です。サルには、猿落くん(※2)という柵の上の方に弾力のあるポールにネットを張ったものが開発されており、効果が高いようです。

4.) 捕まえる

本来の狩猟期間は11月～3月ですが、被害の出ている地区で市町村の許可があれば期間外にも有害駆除として捕獲され、報奨金の設定がされています。もちろん狩猟免許が必要ですが、銃猟、わな猟あわせ、その数は県内で年間2万頭に及ぶと言われています。

1) 食べる

猪は脂がのって猟師さんにも人気です。鹿は赤身で大変おいしくヘルシー、鹿肉利用については、もう少し詳しく書きたいのですが残りスペースもありません。次号、新年のコラムとして掲載します、少々お待ちを！

2) 研究用資料や標本

四国にはこれまで、四国产の動物の骨格標本を多く集めた博物館などがありませんでした。最近では交通事故や有害駆除の個体から研究用の骨格標本や遺伝子のサンプル、データを取り、大学や各研究機関と連携し提供できるようになってきました。このデータがさらに共生のための礎となることが期待されます。(記事:多田さやか)